

する。片寄らないように書くとして、片寄らないように書く。警察官もそうであると元警察官が語っていた。例えば、下着泥棒がいたとする。夜通し見張っていて、捕まえてみれば近所の高校生だったりする。逮捕はしなかったそうである。順々と諭す。それだけだそうである。奥さんと2人で島に赴任したころ、一角らしい。その裏には記事にならない事件が多くあるらしい。しかし、どうしても見逃すことができない悪辣な行為は事件にするといった。風呂場を覗いたくらいなら諭すだけにするが「これ以上のことを犯すと逮捕する」と強く諭すそうである。記者も難しいのかもしれない。去年、「姉しゃまー田谷幸吉とその時代」を書いた。選挙が激しい土地に長崎市から嫁いだ姉しゃまの物語である。姉しゃまはマラソンランナーを育て、トップランナーにするのが夢である。この物語にも本音が書けずに苦しむ地方紙の記者が登場する。政治家の演説も立派な内容ではあるが、どこかにちらりと本音が滲んでいたりする。

新聞は裏から読む

「文は人なり」という言葉がある。昔、ある新聞記者が「新聞の記事は比喩を用いては書けない」と言った。つまり「この世のものとは思えない風であった」といった類の文章は書けないと言っているのである。しかし「文は人なり」なのである。西日本新聞ならば「春秋」の欄がそうである。なんとなく書いている人の人となりが想像できる。「五十代後半かな」といった想像である。どこの大学で何系だったかも想像する。スマホで事が足りる時代である。しかし、記者の本音を窺いながら新聞を裏から読むというところ想像できる。地方紙の記事はなかなか本音を窺わせる文章が書けないそうである。朝晩、顔を合わせている人や地域の問題は書きづらいものらしい。

ともあったそうである。奥さんには奥さんの付き合ひがあり、朝、浜で取れた魚をおすそ分けで貰ったりする。好意を断るのは難しいらしい。よっぽどの事でない限り、見てみないふりをする。島の名物も貰ったらしい。

新聞記事になる事件は氷山の親兄弟、親戚の事。本人の将来のことまで話をする。そうすれば、大抵の人は立ち直るそうである。ただ、稀に「あの時、逮捕していればよかった」と臍を噛む人もいたりするらしい。人は、どの世界の人も難しい。比喩を用いて記事を書けない新聞のか。

「金と票」である。テレビの演説や新聞の記事にそんな感じを受けるのはわたしだけではないはずである。「文は人なり」である。わたしの文章にも、どこかに本音が滲んでいる。しかし、政治家はなぜ紺の背広が好きなのか。